

この数回の連載ではさまざまに漁法を紹介しています。

前回紹介した築魚の原稿を作成している最中に、大津市関津に所在する関津遺跡から

鎌倉時代の上り築の遺構が見つかりました。類が類を呼んだのでしょうか。そこで、今回は急遽予定を変更して、関津遺跡から見つかった築を紹介

します。関津遺跡は、旧石器時代から近世に至るまでの、さまざまに時代の生活の跡が輻輳している遺跡です。中でも、奈良時代の幅18尺にも及ぶ道路の跡、戦国時代の城郭の跡(関津城)などが大きな注目を集めました。

今回見つかった鎌倉時代の上り築は、遺跡の南を流れる「獄川」の前身と考えられる、幅12尺ほどの河川の跡から見つかりました。築の平面形は、

将棋の駒のような形で、魚がのぼってくる川下に向かって大きく口を広げています。規模は幅が約7尺、長さは約8尺以上。築は、川が緩やかにカーブする場所に設置されていました。築の構造は非常に巧みです。魚は、流れに寄せられるようにのぼる性質があります。そのため、人為的に流れをコントロールして、流れを狭いところに集中させ、

ここをめぐらせてのぼってくる魚を捕るのが、上り築のセオリーです。

今回見つかった築は、築の上流側の中央から、上流に向かって杭が一行に打ち込まれ、この杭列により、川の流

れは、築の方に誘導されます。築の北隅には幅が40尺ほどの狭い隙間があり、川の流れはこの隙間に導かれ、強い流れとなつて築の中に流れ込みます。下流からのぼってきた魚達は、自然と築の中に入り、さらに、この狭い口に集まって来ます。そして、この口を

乗り越えようとしたとき…この狭い隙間に、例えば、釜のような罟を仕掛けておけば、魚達はすべて釜の中に入れて出られなくなってしまう。漁師は、適当な時間を見計らって釜を引き揚げ、中に入った魚を持ち帰ります。この築で捕られた魚は、川底

が砂利質であることから、強い流れを好む、コアユ、ウグイ、ハス、ニゴイなどだったのではないかと考えられます。

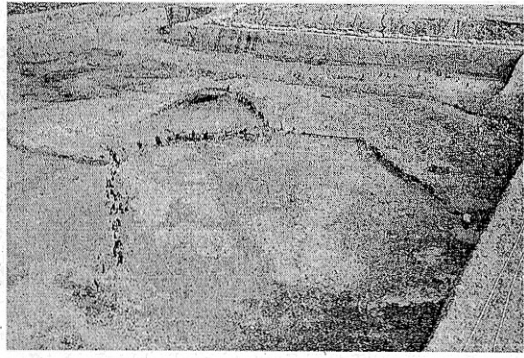
このように、築の構造や、漁獲方法まで復元できる発掘調査例はきわめて珍しいもので、漁業技術史のうえで、重要な発見となりました。

もう一つ、この築の特徴には大きな意味があります。それは、築を川幅一杯には造っていないことです。狭い川ですから、築で完全に川を遮断して、のぼってくる魚をすべて一網打尽にすることも、技術的には可能だったはずですが、しかし、それをしている

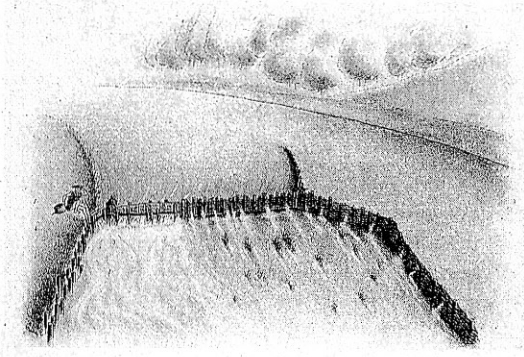
せん。船の行き来や、上流にも築があったためなどの理由が考えられますが、結果として、資源の枯渇を防ぐ、捕りすぎない漁業が行われていたのです。自然と共生する資源利用の姿を具体的に示してくれる意味においても、大切な発見となりました。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 大沼芳幸)

## 関津遺跡の上り築



関津遺跡で見つかった鎌倉時代の「上り築」



発見された上り築の復元図 (滋賀県文化財保護協会提供)

# 捕りすぎない漁法

が砂利質であることから、強い流れを好む、コアユ、ウグイ、ハス、ニゴイなどだったのではないかと考えられます。このように、築の構造や、漁獲方法まで復元できる発掘調査例はきわめて珍しいもので、漁業技術史のうえで、重要な発見となりました。もう一つ、この築の特徴には大きな意味があります。それは、築を川幅一杯には造っていないことです。狭い川ですから、築で完全に川を遮断して、のぼってくる魚をすべて一網打尽にすることも、技術的には可能だったはずですが、しかし、それをしているせん。船の行き来や、上流にも築があったためなどの理由が考えられますが、結果として、資源の枯渇を防ぐ、捕りすぎない漁業が行われていたのです。自然と共生する資源利用の姿を具体的に示してくれる意味においても、大切な発見となりました。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 大沼芳幸)